



瀬藤名誉教授

## 回 想

瀬 藤 象 二

初代所長・東京大学名誉教授

1. 第二工学部のできたいきさつ 昭和16年(1941)初頃の国際情勢は険悪をきわめていたので、わが国の重工業を劃期的に発展させるための方途として工学教育を振興する必要がある、それには東京大学のように教官陣容の充実しているところに、もう一つ工学部を設けることが、最も効果的であるということになった。話がきまると急速にこれを実施に移すために、東大内に第二工学部設立準備委員会が設けられ、当時の総長平賀譲氏から、この学部ができたなら学部長に就任して欲しい、その予定を以って、学部建設の仕事の計画と実施の責任者になってもらいたいとの要望があった。私は当時50才でこんな仕事をやり遂げる自信もなかったが、事態の切迫していることを考えて、この要望を断わる気持にならなかったで、とにかく引受けることにしたのである。引受けてからの14ヶ月間は、土地の選定から建物、設備の計画、調達をはじめ、各学科の教授、助教授、助手、事務官等の人選について、当時の東大としては、全学的の仕事として取り上げられ、翌年4月には、機械、電気、建築、土木、船舶、造兵、応用化学、冶金、航空、航空原動機の10学科と共通教室3、講座数69、学生定員一学年420名の学部が開設され、私はこの学部の初代学部長に補せられた。

昭和19年に第1回卒業生を世に送り出してから、昭和26年までの間にこの学部を卒業した者は2,598名に達しており、わが国の工学、工業界にそれぞれ活動している。

終戦後、東大内で、この学部を今後そのまま継続して存置すべきか否かの論議が行われた。日本の科学技術教育は強化すべきであるのに、折角できているこの学部をやめることは時代の要求に反するとの意見もあったが、東京大学という総合大学の立場から、バランスのとれた学部構成を希望する意見の方が大勢を制して、第二工学部は学部としては存続せず、昭和24年5月から新たに生産技術研究所として発足することになり、新規に学生を入学させることを打切ったのである。

2. 生産技術研究所の構想 わが国が明治維新以来、近代工業を活発に発展させ、国民経済の近代化を急速に成功させたことは、世界各国が驚異の眼で見ていることである。明治維新(1868)から数えて大正末期(1926)まで58年、この比較的短い期間に、あれだけの近代化を実現したこと、その間のわれわれの先輩の苦心と努力とは、今のように諸事スピード・アップされていなかった時代であることを考慮に入れれば、実に大変なものであったと思うのである。しかし、その反面万事がバランスの取れた発達とはいえないことも、また事実であって、工学と工業との関連においても、工業は欧米諸国ですでに出来上がったものを取り入れ、設備も原材料も、設計も、技術も、皆輸入ということでスタートした。一方工学は外国から雇った教師に教えられ、外国に留学して帰った日本人が、そのあとの教授として採用されたが、輸入技術による工業とのつながりは直接にはなかったのである。大正中期から工学の教育も研究も相当盛んになって来ているが、上記の沿革のないきさつは依然尾を辿っていて、工学は世界的レベルに達しても、現実の工業は依然として外国依存を続けがちである。

この沿革的な日本の弱点を劃期的に打破するためには工学と工業との連契をモット密にし、現在の生産技術に独自の研究を織り込む方途を積極的に講じなければならないのである。また独自の研究によって新しい工業をわが国内で開発するように進めなければならないのである。

幸い、われわれの学部の構成は工業の各分野に亘る基礎としての工学の各分野を網羅している。この陣容と設備とで上記の目的に貢献することが、わが国の工業をそのあるべき姿に持って行くために最も適当な処置であろう。このような構想が学内および文部省の承認するところとなったが、当時連合軍総司令部の科学技術課次長であったH.C. Kelly氏をこの案に賛成させるには、相当の手数を要した。彼は案自身には賛成であったが、駒場の理工学研究所と一所になって駒場に集結することを可とするとの主張をもち続けたのである。われわれはこの仕事には相当の面積の土地を必要とすることを具体的且つ詳細に彼に説明し、渋々彼の了承を得たのであった。

3. 将来への展望 簡単に工学と工業との連契を密にするための生産技術研究所といっても、その任務の達成には幾多の困難を伴うことはいうまでもない。過去10年の実績を開設当初の構想と比較した場合に、果してこの研究所が国民経済にどれだけ寄与したか、あるいは寄与する可能性を現わしているか、ローマは一日にして成らずということばのように忍耐強く努力を続ければ、必らず所期の目的を達成できると私は確信しているが、それには所員諸君の合目的な研究重点の集中と、関係工業界政府当局の理解のある支援とが要望される。